Mayr, E., Linsley, E. G. & L. Usinger, 1953. Methods and pricnciples of systematic zoology. New York.

Morton, C. V. 1957. The misuse of the term taxon. Rhodora **59**, 43-44.

Rensch B. 1929. Das Prinzip geographischer Rassenkreise und das Problem der Artbildung. Berlin.

————, 1958. Die ideale Artbeschreibung. Acta Univ. Upsal. **1958**: 6, 96-103.

Turesson, G. 1929. Zur Natur und Begrenzung der Arteinheiten. Hereditas **12**, 323-334.

○オダマキ資料（久内清孝） Kiyotaka HISAUCHI: Historical note on cultivated *Aquilegia.*

春庭に咲くオダマキは北方の産でミヤマオダマキの馴化したものだということをよく聞くが，その傍証ともなりそうな雑文がある。其一は寛政5-9年（1768-1772）にわたる年間のことを記録した柳原紀光の閑窓自語中に「瑠璃おだまき草事」なる見出しで「松前よりちかき海中に小島といふ所ありその所にをだまき草（楼斗菜）といふくさのるりの色にさけるありそのたねを安永中にたかの入道中将隆国朝臣のもとへ松前守護のもののふよりおくりしをうゑて近頃世に多くなれり　故主殿権助佐伯職朝臣の第に蘭山といひて博識のものありこのくさ世にしれぬうちに見せける人のありしがいづかたよりきたれるやらんめづらしき草なりといふ　たづぬる人しらずといへりければつらつらなほ見てこの色は海辺に生ずるなるべし　花の色を見るに東国のものならんといへり　その道をえし人の見るところいささかたがはざりけりと見せし人大に感ぜしなり」其二は安永文化12（1779-1815）にわたる随筆である大田南畝の一話一言第13巻に「近来芸圃の家にもてはやせるヲダマキ草」なる記事がある。これら両書によればこの草が松前産で当時江戸ではやつた様子がわかる。

尚上記二書は日本随筆大成に収められていて，前者は第二期第4巻695頁後者は同別巻一話一言上525頁によつたものである。

□盛永俊太郎編：第三稲の日本史　東京千代田区霞ケ関2の1農林協会発行 B 6 版 pp. 278（1958, 12 月）1957 年に第二稲の日本史を出した稲作史研究叢書の第3集，前と同様に研究会での速記を中心にしたもの，日本稲作の起源と発達（安藤広太郎），日本につながるアジアの稲（盛永俊太郎），朝鮮の稲作（永井威三郎），稲作の慣行（早川孝太郎）の4編で，講演とその後の討論を含む。色々の面からみた稲がクローズアップされている点で面白いしまた参考となると思う。野生稲と浮稲の原色口絵あり。因に稲と日本史（第一に当る）は絶版のところ訂正を加え，注記を補つて 1959 年6月に再版された。（前川文夫）